

〈論文 日本史学〉

## 武州八王子に見る地域市場の展開

### ―八王子縞買の動向を中心に―

岩 橋 清 美

#### 要旨

本稿は武蔵国多摩郡八王子町（現東京都八王子市）を事例に、近世後期の地域市場の特質を分析したものである。八王子市場は一七世紀末以降、「八王子織物」と称される絹織物の取引によって江戸近郊の地域市場として発展を遂げてきた。この絹織物取引を支えていたのが「縞買」と呼ばれる在郷商人である。縞買たちは八王子の市で集荷した織物を、主として多摩地域および江戸の中小の呉服屋に売り捌いていたが、一八世紀以降、庶民の絹織物嗜好をうけて、三井越後屋等の江戸の大呉服屋や近江商人とも取引を行うようになった。本稿では彼らの多様な取引を分析し、その背景に原料の生産から製品化までを行う織物生産圏の形成があったことを論じた。

#### キーワード

地域市場 八王子市 八王子織物 縞買 江戸地廻り経済

#### はじめに

本論文は、武蔵国多摩郡八王子町（現東京都八王子市）を事例に、近世後期の地域市場の変容を分析するもので

ある。八王子地域は戦国大名後北条氏の支配の拠点だったが、徳川氏の関東入国後、町場として再整備され甲州道中の宿駅・地域市場として発展した。八王子地域は近世前期より織物生産が盛んで、織物取引は八王子市の中心であった。「八王子縞」と称される縞柄の絹織物は、元禄期以降、江戸町人の絹織物嗜好によって需要を増し、江戸地廻り経済の広がりとは相俟って取引が拡大された。

江戸地廻り経済は、巨大都市江戸の需要に応じるために、江戸と関東地域の村々との間に形成された生産・流通関係である。これまでの研究では、国内市場の形成を支える地域市場の一形態として理解されており、江戸向け商品生産地帯形成の地域差・在方商人の動向・流通機構の変化等が明らかにされてきた。<sup>(2)</sup> 地域市場に関する研究は、北関東荒廃論、豪農・半プロ論の影響のもとに展開したが、一九八〇年以降、近世・近代移行期の動向に注目した研究が行われるようになった。ここでは、商業資本に対して、従来の問屋制家内工業における生産者農民への吸着という評価を否定し、農民経営の補完、在方産業の編成、地域市場の全国市場への展開促進といったプラスの側面を評価する見解が示された。<sup>(6)</sup> これをうけて、一九世紀前半における農村部の商品経済の発展が村落共同体を崩壊させていくだけではなく、生産者を守っていく段階があり、そこに地域市場の変質を認めることができるという論点が出された。<sup>(7)</sup> さらに、近年では、白川部達夫氏が、地域市場を、豪農経営の蓄積対象や江戸問屋の統合の対象としてだけではなく、その独自性に着目して理解すべきであるとの見解を展開している。<sup>(8)</sup> 氏は、常陸国土浦の干鰯商人を事例に江戸を媒介としない地廻り各地域間の直売買が新たな地域市場を形成していることを論証した。さらに、こうした市場では商人たちは前貸し支配に寄りかかるのではなく、商品の品揃え・品質・価格等の面で経営的努力を行っていたことも明らかにした。

本稿では、こうした先行研究に学びながら、地域市場としての八王子の独自性とそれを支えた構造について考えることを目的とする。具体的には縞買仲間と江戸呉服問屋・近江商人との関係を分析し、地域市場としての八王子

市の特質を明らかにする。

八王子の織物産業については『八王子織物史』<sup>(9)</sup>をはじめ『八王子市史』・『昭島市史』・『青梅市史』<sup>(10)</sup>で取り上げられている。なかでも『八王子織物史』は生産構造・流通構造を明らかにした先駆的研究である。八王子町については史料の制限もあるため、織買の存在構造、織物取引の概要については『八王子織物史』に依拠せざるを得ない部分が多いことを断っておく。

ここで分析対象である八王子町と八王子縞市の概要について述べ後段の前提としたい。<sup>(11)</sup>八王子町とは八王子横山一五宿の総称である。八王子横山一五宿は、甲州道中の宿駅業務を務める横山・八日市宿(本宿)、他一三宿の脇宿・加宿から構成される。本宿は加宿に対して様々な特権を持っていたが、その一つが市開設権である。八王子市は四と六の日に行われる六斎市で、四日・一四日・二四日は横山宿、八日・一八日・二八日は八日市宿に市が立った。ただし、横山宿の場合、東から四日場・一四日場・二四日場に分かれており、月三回の市は別の場所で行われていた。両宿は市開設の特権に対して年間金一五兩の運上金を納めた。この運上金は表通りの家主が負担し、彼らはその反対給付として市出諸商人が支払う庭銭を取得した。この庭銭の一部が宿入用にもあてられており、市は宿場財政の維持のためにも必要とされたのである。

八王子市は一〇種類程度の座からなり、それぞれ座割に従い、一定の場所で商いを行っていた。座は元禄二年(一六八九)の段階で肴座(三四間)、太物座(三三間)、穀座(三三間)、紬座(二七間)、塩座(二七間)、紙座(二二間)、高見世座(一二間)、薪・竹長木座(二二間)、麻座(二〇間)、繰綿座(九間)の一〇座が存在した。<sup>(12)</sup>間数から見れば、近世前期においては、肴座・太物座・穀物座の需要が高く、太物の営業面積が紬よりも広がったことが注目される。

縞市(八王子絹市)は元禄期から享保期にかけて成立したと推測されている。<sup>(13)</sup>元禄二年(一六八九)以降、糸座・

小間物座が新設され、座を整理する必要から太物座と袖座を統一して縞市とし、その他の市と分離した。八王子市では早朝に縞市を開き、終了後に他の市が開かれた。八王子市は領主経済の拠点として成立したが、元禄期には周辺地域の民衆が生活必需品を売買する地域市場として確立した。八王子織物は先染織物であるため呉服問屋に依拠せずに商品を生産できたことから、江戸の庶民層の絹織物嗜好に呼応して生産量を伸ばした。

縞市を支えた基盤には、八王子周辺地域における養蚕・製糸・織物の展開がある。例えば、梶田村（現東京都八王子市）石川家（持高八石余）の享保五年（一七二〇）の農事日記をみると、享保期には一畝程度の自給綿作を行っているが、天明元年（一七八一）頃から小規模ながら養蚕・製糸が始まり、寛政八年（一七九六）年以降は完全に綿作をやめ、養蚕・生糸に専念している。<sup>(6)</sup> こうした石川家の農業経営の変化は一八世紀後半の八王子縞市が周辺地域に対して強い求心性を持っていたこと示している。多摩郡西部・南部の山間の村々における養蚕・製糸・織物は八王子縞市の拡大にともない強固な地場産業として展開し、縞市を支える基盤になったのである。

## 一 八王子縞買の構造と特質

ここでは、縞物の取引の中心である八王子縞買の動向を分析し、その特質について述べる。縞市の取引は、当初は市場の両側に筵を敷き、その上に油簞を引き並べて買い付けるものであった。安永期以降、織物の品数が増える<sup>(7)</sup>と、織物生産者が油簞台に商品を並べて取引を行うようになった。縞買は油簞台で商品の品質を見定めて値段を決め、織物生産者がその値段に納得すれば取引が成立した。<sup>(8)</sup> 基本的には、縞買とは市で複数の油簞台をまわり織物を集荷する者をさす<sup>(9)</sup>が、その経業形態は一八世紀後半以降、多岐にわたる。

### (1) 八王子縞買の経営形態

八王子の織物商人は一般的に「縞買」と呼ばれた。彼らの営業形態は時期によって変化があるが、一八世紀後半には以下の四つに分類できる。<sup>(8)</sup> 第一に江戸の大呉服屋の代買がある。これは彼らの注文と資金によって市で織物を買付けけるものである。第二は江戸の中小呉服屋への販売である。第三は市場を通さず、直接、生産者から買い付け、小売や素人に販売するという形態である。<sup>(9)</sup> 第四は近江商人の買継で一九世紀に入り広く見られるようになった。縞買の多くは、この四つの形態を同時に併せ持つて経営を行っていた。

縞買はその居住地から二つに分けられ、宿内に居住する者を「宿方縞買」、村に居住する者を「在方縞買」と称した。両者の発生時期については明確にしないが、宝暦期には在方縞買が織物流通に与える影響力が大きくなり、宿方縞買の脅威になっていた。

縞買は、寛政期以降、五〇〜六〇軒前後が存在し、そのうち宿方縞買が一五〜二〇軒、在方縞買が四〇軒前後であった。<sup>(10)</sup> 宿方縞買には横山宿・八日市宿に居住する者が多く、宿役人を兼ねる者もいた。在方縞買は、宮下・駒木野（以上、八王子市）、中神（昭島市）、伊奈・五日市（以上、あきる野市）、千ヶ瀬・柚木（以上、青梅市）を中心に西多摩地域に多いが、相模国津久井地域や武蔵国入間郡・高麗郡にも分布している。彼らは村役人あるいは村落上層で、地主経営の他に金融業・酒造業を営んでいた。村内に賃織生産者を抱える者も見られる。彼らの織物取引は、地主経営や金融業を基盤としているため流動的であり、家経営の状況に応じては休役・廃業に至ることもあった。

また、縞買は議定書を作成して、目方をごまかす「糊入」織物および短尺の織物の流通を禁止し、商品の品質管理と取引の公正化を維持していた。<sup>(11)</sup>

## (2) 中野久次郎に見る在方縞買の成長

在方縞買のなかで中心的人物に中神村中野久次郎がいる。在方縞買としての中野家の特質は、自村あるいはその周辺村に存在する織元と密接な関係を持ち、宮下村荻島家とともに在方縞買の惣代的な役割を果たしていた点にある。中野家の経営の変容を紹介しながら、この点について分析したい。<sup>24)</sup>

中野家は当該地域有数の豪農で、「中久」・「中久大尽」と称された。中神村は旗本坪内・曾雄氏の二給支配であったが、村内は三組に分かれており、各組に村役人が存在した。中野家は近世中期以降、経済的成長を遂げ、文政一二年（一七二九）に名主役に就き、旗本坪内家の勝手賄も務めた。同家の経済活動は①在方縞買を中心とする商業活動、②質屋・金融活動、③地主経営（持高一五〇石）からなる。なかでも中心は縞買と金融業だったが、天保六年（一八三五）頃を画期に総資産に占める金融業の収入が高くなっている。天保期の店卸帳によれば、天保の飢饉の影響が大きかった天保七（一八三六）・八（一八三七）年を除き、一年間の収入は金一〇〇両から金四〇〇両程であった。天保二年（一八三一）に金四五〇〇両余であった総資産は、天保一五年（一八四四）には金七五〇〇両余まで増加している。天保期に経営の中心が金融業に傾斜していった背景には天保改革の影響で絹織物の売り上げが減少したとこと、八王子絹市に「糊入」織物が出回るようになったことがある。中野家は織物の仲買のみで、繭・糸といった原料の取引は行っていなかったため、横浜開港後の生糸値段の上昇が引き起こした原料不足による織物直段上昇の煽りで明治初年には急速に経営を悪化させていった。

次に中野家の在方縞買としての成長過程を見ていこう。管見の限りでは、中野家は明和期には縞買を始めていたと考えられる。寛政一一年（一七九九）に三井越後屋の買宿に任じられていることから、この頃には強固な経営基盤をつくりあげていたと言える。<sup>25)</sup>文化期以降は、経営困難に陥った在方縞買の買継株を取得してさらに経営を拡大した。文化一一年（一八一四）一二月、中野久次郎は、拜島村八郎兵衛から尾張町蛭子屋八郎右衛門、本石町近江

屋三左衛門・加賀屋善兵衛、本町樋屋四郎右衛門、大伝馬町大黒屋新九郎・島屋藤兵衛・植木惣右衛門といった江戸の大呉服屋への買継株を譲渡されている。八郎兵衛は蛭子屋等からの前借金で織物の代買を行っていたが、借金が金一四〇両にまで嵩んでいた。これを久次郎が買継株と引き替えに引き受けたのである。文化一三年（一八一六）三月には、八郎兵衛から京都呉服商小橋屋の買継役も引き受けている。その後、文政六年（一八二三）六月、小川村（あきる野市）儀左衛門から買継株と商売の諸道具を譲渡されたが、この時、作成した「編方・糸方得意諸道具取調帳」によれば、儀左衛門の取引先は二八軒で、内訳は江戸九軒、秩父一軒、上野二軒、下野一軒、下総二軒、近江二軒、京七軒、大坂二軒、堺一軒、仙台一軒となっている。江戸を中心としながら取引は関西・東北へも広がっていることが看取できる。その後、安政六年（一八五九）二月にも、小門宿直吉から呉服類買継株が譲渡されている。中野家は経営困難に陥った編買の買継株を買い取り、その取引先を吸収することで経営を拡大していったと言える。

また、中野家が宿方編買の経営にも関与していたことを示す史料もある。

### 【史料1】<sup>(2)</sup>

#### 差入申一札之事

一金四百四拾五両也

右者私父林兵衛儀地産之織物買継渡世罷在候処、去多年林兵衛病死致し、右渡世出来兼候ニ付、相原村伊兵衛方江相頼買次罷在候処、貴殿方ニ旧来相勤候源蔵貫請候ニ付、右御得意方へ諸事御引請之一札貴殿より御差入被下、前書御得意方一同御立戻リニ相成、去辰七月々難有買次渡世仕候処、源蔵長煩致し追々不如意ニ相成、然ル処家内不熟ニ付、無余儀致離縁候上者右渡世向難出来候ニ付、親類組合相談之上御得意方不殘御引請被下

候様相頼候処、御聞届ヶ被下、右ニ付前書之金子御出金被下度旨尚又相願候処、格別之以御慈悲を御聞濟被下忝一同安心仕候、然ル上<sup>者</sup>右買次方之儀貴殿御勝手能様御取計可被成候、万一故障申者有之候ハ、連印之者一同引請、貴殿聊御苦勞相懸申間敷候、且身上向立直り御出金不殘返上仕候ハ、右御得意方一同御返シ可被下候筈、依之組合親類連印一札差入申処、仍而如件

八王子八木宿

安政六末年四月

源藏後家

せ い ㊦

同所

親類

軍 平 ㊦

(他四名略)

中神村

久次 郎殿

右の史料は、八王子八木宿源藏後家せいが源藏の長病から経営が成り立たなくなったため、金四四五両で買継株を中野久次郎に譲渡した際の証文である。これによれば、久次郎は以前から源藏家の経営に関与しており、同家が経営難に陥り相原村伊兵衛に買継を依頼していた時、源藏を婿に迎えさせ経営を立て直させたという。ここで注目されるのは買継株が金四四五両という高額で取引されている点であり、八王子絹市の織物取引の隆盛がうかがえる。

このような中野家の搞買としての成長を支えた基盤は何に求めることができるのであろうか。まず、第一には



同家の多角的な経営があげられる。第二には中野家が中神村および周辺村の織元と密接に結びついていたことがある。八王子周辺の山間村落では、天保期には持高一〇石未満の賃織生産者が多数存在していたことが確認されている<sup>88</sup>。零細農にとって織物はもはや農間余業ではなく再生産に不可欠な生業であった。多摩郡南部・西部に広がる養蚕・製糸・染め物・織物は地場産業として一八世紀後半には、すでに強固なものになっていた。中野家は賃織生産者を抱えていたわけではないが、強固な地場産業の展開なくして大規模な綿買活動は成立しえなかったと言える。中野家は村役人として中神村はじめ周辺村の百姓経営の保護に積極的に乗り出していた。例えば、天明四年（一七八四）の宮沢村へ夫食代金を貸与、天保飢饉時の自村への金二〇〇両の献金、周辺村々への米の施行等があげられる<sup>89</sup>。中野家は領主にかわって「御救」を行い、地域の「百姓成立」を支えたのである。こうした地域指導者としての地域社会への貢献が織元たちの生活を支え、織物を地場産業として定着させたと考えられる。また、遣水村など八王子周辺の村々の百姓にも金子を貸し付けており、彼らの織物生産を支えていた。在方綿買と織元たちの強い結びつきは、宿方綿買と在方綿買との争論にも見ることができる。

### （3）宿方綿買と在方綿買の対立

一八世紀末に至ると、織元たちと結びついた在方綿買の存在は宿方綿買の脅威になっていた。寛政期以降、宿方綿買は在方綿買の八王子市への影響力を抑制するために、しばしば争論を起こしている。以下では「八王子市場一件」と言われる文政元年（一八一八）の争論を取り上げる<sup>90</sup>。

争論は、文化一五年（一八一八）四月一日、八日市宿名主郡蔵（宿方綿買）が中神村久次郎・宮下村源兵衛（いずれも在方綿買）に対して、代官から市場の不取締を指摘されたことを理由に取締りの徹底を申し入れたことに始まる。郡蔵をはじめ横山宿名主七郎兵衛・年寄三郎兵衛（いずれも在方綿買）の主張は以下の通りである。

【史料2】<sup>(31)</sup>

此度御支配御役所より市場不取締之趣御察当有之、依之致取極候、尤紬座者市頭有之候間、先是より取極メ、糸座古着座肴座迄追々致取極候、且紬座之儀近年私之致儀定、座並高取極リ候ニ付自然と市立遅相成、往々見世店諸商人共衰微ニ成行候間、此度相改メ、座並在宿共駆付次第朝五ツ時市立相始メ可申

八王子市は縞市（紬座）を早朝に行い、その後、各市が始まることになっていたが、近年縞市の開始が遅延しているため、他の市にも影響を及ぼしていた。そこで、宿方縞買は在方縞買たちに対し、これまでの「座並」を廃止し「駆付次第」として時間通りに市を始めることを提案したのである。「座並」とは買付場所の割当のことで、縞買たちはそれぞれ決められた買付場所で行っていた。この「座並」は寛政六年（一七九四）の宿方縞買と在方縞買の争論の過程で決められたものである。宿方縞買は八王子市に集まる商人数が増加したので、鑑札を交付して、これを所持する商人のみに取引を限定しようとした。しかし、在方縞買が鑑札交付に反対を唱えて争論となり、買付場所を割当制にすることで落着いたのである。<sup>(32)</sup>

「座並」廃止の提案は八王子から遠隔地に居住する在方縞買たちにとって、前日からの宿泊が必要になり、費用も嵩むことになった。このため文政元年（一八一八）五月七日、在方縞買二四名は議定書を作成して「座並」廃止に抵抗することを決定した。<sup>(33)</sup>しかし、郡蔵らが訴状を提出したため、この一件は評定所の吟味をうけることになる。評定所では、①在方縞買の新規市取立の企て、②市立遅延、③新規出市者の届出の厳守の三点について吟味が行われた。在方縞買は①については否定し、平井・五日市で市を取り立てたとしても、それは旧市の復活であると述べた。②に対しては、遅延を理由に「座並」を廃止すれば市が混乱し取引ができなくなると主張した。③については新規出市者の届出を行うこと自体を否定した。<sup>(34)</sup>争論は、文政元年（一八一八）六月に内済するが、在方縞買の主張が認められ、従来通り「座並」が維持されることになった。<sup>(35)</sup>争論は縞買内部の宿方縞買と在方縞買の対立を顕在

化し、さらに在方縞買が市場において優位であることを明らかにした。

在方縞買が自らの要求を貫徹できた背景には織元たちの協力がある。「座並」廃止が出されてから、村々（織元）は八王子や拝島に集まりたびたび話し合いを行っている。そのなかで注目されるのは、織元が「百姓稼計<sup>二</sup>而者御年貢御上納相成兼候ニ付、織物第一ニ致渡世候、然ル処、在方縞買中商売相休候<sup>而</sup>ハ甚在方及難儀候間、外々江市立致呉候様仕度候、然ル上ハ村々小前江申聞、八王子両宿<sup>二</sup>而小買物迄為致不申候<sup>一</sup>」と主張している点である。織元たちは畑作だけでは年貢を納めることができず、織物は生計を維持していくためには不可欠だった。そのため、織元たちは、八王子縞市の「座並」廃止によって在方縞買が八王子で取引を行わないのであれば、八王子以外の場所<sup>三</sup>に市を立て、八王子での生活必需品の購入を拒否することも辞さなかったのである。

つまり、八王子周辺地域では、在方縞買と織元の密接な関係に支えられた織物産業が地場産業として展開しており、それが市場を支えていたのである。在方縞買の多くは織元が居住する村役人であり、質地や貸金を通じて経済的にも結びついていた。質地主小作関係は高利貸の関係に変化する側面も多分にあったが、その一方で村落共同体に内在する融通的側面も有していた。<sup>80</sup> 融通的側面が機能していたからこそ、織元たちは宿方縞買ではなく、在方縞買に従ったのであろう。そして、織物は強固な地場産業となったが故に八王子縞市に依存する必要性もなかったのである。むしろ市場が織物に依存して発展してきたため、宿方縞買と在方縞買の対立を引き起こしたのである。

## 二、江戸呉服問屋仲間と八王子縞買

寛政四年（一七九二）、宿方縞買井田林兵衛が三井越後屋の買宿に任じられると、八王子縞買たちは、これを契機に江戸の大呉服屋と関係を持つようになる。しかし、文化一〇年（一八一三）に、江戸表呉服問屋仲間によって直売買が統制されると、縞買たちは呉服問屋と対立することになった。ここでは、寛政期以降の江戸呉服屋と縞買の関係について述べていく。

### （一）三井越後屋の買宿取立

絹織物の生産は、近世初頭には京都西陣が独占していたが、一八世紀後半に至ると足利・伊勢崎・八王子・秩父等でも盛んに行われるようになった。八王子の織物は、半製品である生絹とは異なり、先染の絹織物で完成品だったため、京都を中央市場とする絹織物の流通機能を打ち破り、直接、江戸や関東諸地域と結びついた。そして、その背景には、先述のように在方縞買たちの成長があったのである。

八王子織物と江戸との関係は、寛政期を画期に活発化する。縞買は江戸の大呉服屋と結びついて販路を拡大していくが、ここでは、三井越後屋との関係をとりあげることにしたい。越後屋の経営組織のなかで関東絹の仕入れを担当していたのは江戸向店である。八王子織物（山物）の仕入れ状況を見ると、享保期には郡内（甲斐国都留郡）に次いで多い。寛政期の関東絹の仕入高は、年間銀七〇〇貫目から一一〇〇貫目程であるが、このうち郡内絹と山物の取引が占める割合が銀六〇〇貫目から八〇〇貫目で、江戸向店の取引において重要な位置を占めていたことがわかる。

八王子織物の取引については以下のような記述がある。

### 【史料3】<sup>(40)</sup>

八王子買方之儀、是迄代買<sup>ニ</sup>而調来候処、いつとなく代呂物風合吟味方相佗買面之差略、嶋模様等当地存念<sup>ニ</sup>入り兼候<sup>ニ</sup>付、此度新に仕法相立買方役差向<sup>ニ</sup>而直買致させ候、尤失却等彼是相掛る事<sup>ニ</sup>候得者其だけ買元<sup>ニ</sup>利潤無之候<sup>而者</sup>難濟道理<sup>ニ</sup>候、偕又買宿亭主者永々之義、右同様之心掛にて手前買もの何卒世間買方よりは格好能買入候様氣配專要<sup>ニ</sup>候、畢竟買方<sup>ニ</sup>差遣し候手代者年若<sup>ニ</sup>て土地不案内之事勿論、折々新役に相替り候<sup>へ者</sup>自然目利も行届申間敷、買方手代共罷帰候跡<sup>者</sup>猶更之儀<sup>ニ</sup>候得者只々買もの善悪は宿主人之働<sup>ニ</sup>有之候、右心掛薄仕向不宜時は格好よろしき品世間へ被買取、剩世上評判<sup>ニ</sup>拘京・江戸店損失広大之義<sup>ニ</sup>候条此度能々相考真実<sup>ニ</sup>氣を籠、呉々買方手違無之様懸引可仕事

右の史料は八王子での取引方法を定めた「八王子買方式目」の一部分で、買方役の心得が説かれている。これによれば、当初、越後屋が八王子に買宿を設置し、買宿が八王子市で織物を仕入れ越後屋へ送っていたという。しかし、粗悪品が多くなってきたため、江戸向店から市日に買役方が出向くことになった。買宿とは現地の縞買のこと<sup>(40)</sup>で、宿方縞買井田林右衛門家が弘化四年（一八四七）まで務めていた。井田家が買宿に任じられた理由については、「宗寿居士直買<sup>ニ</sup>御廻被遊候買宿<sup>ニ</sup>而候事<sup>(41)</sup>」とあり、三井高利と何らかの関係があったと考えられる。越後屋は、買宿に対して織物の仕入れだけではなく、相場の情報収集もさせていた。<sup>(42)</sup>【史料3】に見られるように買宿は仕入れには欠かせない存在で、買役方がいかに買宿を統御できるかが問題であった。そのため、買方役は市日当日に市場内を見廻ると同時に、翌日には買宿のもとで念入りに織物の確認を行っていた。しかし、井田家には、安価に仕入れた際の差額を着服する等のトラブルが絶えず、越後屋は安く良質の商品を仕入れるために中野家・大貫家を買宿に加えた。<sup>(43)</sup>取引割合は井田五分、中野家・大貫家は各々二分半と決められていたが、中野家にとって越後屋は重要な取引先の一つになった。<sup>(44)</sup>寛政二年（一七九九）に越後屋と中野久次郎との間で交わされた証文には、注文の

品物を井田家へ持参し、そこで買役方の吟味をうけることが決められている。<sup>(46)</sup> このことは、越後屋が商品の品質を維持するためには、宿方購買だけではなく、在方購買の存在も無視しえなかったことを示しているよう。

八王子市は江戸から近い市場だったこともあり、市日には素人も集まり競争もはげしかった。そのため、八王子織物は利益率の面では他地域の織物より低い傾向にあったが、庶民向けの絹織物として需要が高く品物の確保が必要とされた。このことが、文化一〇年（一八一三）の江戸表呉服問屋と購買との争論に発展するのである。

## （2）江戸呉服問屋仲間と八王子周辺村々との対立

文化一〇（一八一三）年一月、江戸表呉服問屋五五軒は、江戸に新規会所を設置し、購買たちが直接、江戸の中小の呉服屋・小売・素人へ売り込むことを制限することを通達した。この背景には文化一〇（一八一三）三月、江戸幕府が十組仲間六五組一二七一軒に対し株数一九九五株を認め、以後の新規加入を禁止し、廃業者の株は仲間  
で預かることを決めたことによる。江戸表呉服問屋仲間の申し入れに対して八王子宿および三ヶ村は直売買禁止を回避すべく勘定奉行所に訴状を提出した。訴状において村々は次のように述べている。<sup>(47)</sup>

### 【史料4】

是迄在方々年来無株札店へ出入商人之義ハ商売相止候様成行、市場へ罷出候義不相成、必至差支、多分之絹買共潰ニ罷成、御株札店へ出入之商人計ニ而ハ市場第一之絹買共潰ニ相成、在方々織出し候絹紬買入方も相減、右ニ付糸繭自然と下直ニ相成売捌ケ不申、市場相潰郡中衰微仕、御年貢諸役并宿方御運上も差障り歎ケ敷奉存候、且右様新規手狭之儀相企、織元ニ而織手間無之、殊ニ会所ニ而買仕多分之雜費相懸ケ、売先々高直ニ仕候儀ハ曆然之儀と奉存候

村々は江戸表呉服問屋が取引を独占すれば、それまで縞市に来ていた商人たちが取引に関与できなくなり、自然と織物自体が衰退に向かうと述べている。さらに、織物だけではなく原料の糸や繭の値段までが下落し、結果として年貢諸役や宿方の運上にも支障をきたすと主張している。八王子周辺村々は江戸表呉服問屋の直取引に対して、年貢諸役と宿方運上の納入という「百姓成立」を主張して自らの権益を守ろうとしたのである。

この争論は同年一月一七日に内済が成立し、新規会所の設立は回避することができたが、直売買については江戸表呉服問屋の主張が認められた。<sup>(85)</sup>ただし、取引の条件として「呉服問屋ニ而織物類善悪ニ不拘、仲買商人其外より不残可買取旨申上候上者、右店々え持参いたし候織物之内、島柄不模様、染色不宜、織方不出来等之品ハ、糸相場目方染代織手間等見積り、織元難儀ニ不相成様都而現金ニ買取可申」とし、<sup>(86)</sup>問屋側が粗悪品も含めてすべて買い取り、織元に難儀をかけないことが決められた。織物が重要な産業になっていた村々の状況を考慮した内容になっている。

この争論は、従来、直接生産者およびそれと結ぶ在方商人層と江戸問屋仲間との対立という三橋会所をめぐる基本的な矛盾の一つとして捉えられてきた。<sup>(87)</sup>しかし、注目すべき点は、この争論が天保一〇年（一九三九）まで続き、最終的には縞買側が年々金三〇兩を支払うことを条件に営業の自由を江戸表呉服問屋に黙認させたことにある。<sup>(88)</sup>縞買は内部には宿方縞買と在方縞買の対立を含みながら、江戸表呉服問屋とも対抗関係にあった。縞買がこうした矛盾を孕みながらも取引を拡大し得た背景には、縞買と織元たちの密接な関係と地場産業としての織物業の定着があったと言える。

### 三、八王子縞買の変容と八王子市場

八王子縞買と近江商人との取引は、中野家の事例に見られるように、すでに文政期には始まっていたと考えられるが、天保期以降、さらに活発化した。以下では、こうした取引の変化が、縞買の営業形態および八王子市にどのような影響を与えたのかを考えていきたい。

#### (1) 取引の拡大と縞買の変質

八王子縞買と取引のあった近江商人たちは、慶応二年（一八六六）段階で八〇軒程存在したといわれ、福寿講を組織して取引の円滑化をはかっていた。近江商人たちは自身が八王子に赴くか、あるいは手代を八王子に送り取引を行っていたが、その際、八王子に止宿先（買宿）を持ち、そこを取引の拠点としていた。<sup>[53]</sup> 近江商人と止宿先の関係は、江戸表呉服問屋のそれと異なり、株化していなかったため、誰でも買宿になる機会を得ることができた。このため、縞買の多くが近江商人と関係を持つことになり、取引が拡大していった。買宿は買役（近江商人）の指示に従って商品を集荷し、絹一疋につき錢四八文、絹一反につき錢二四文の口錢を得ていた。その後、口錢は、縞買の要求が認められ取引金額の一分とすることが定められた。<sup>[54]</sup>

慶応元年（一八六五）七月、中野久次郎をはじめとする縞買二三名は近江商人に対して再度、口錢の値上げを要求した。<sup>[55]</sup> 彼らは近年の物価高を理由に、口錢を取引金額の二分にするよう願い出たが、これはなかなか認められなかった。結局、近江商人が、取引金高一分の口錢のほかに、一疋四八文の縞拵賃、旅籠屋並みの宿泊賃、一人当たり金二朱の臨時入用を支払うことで落着いた。<sup>[56]</sup>

この争論から当該期の縞買の大きな変化を読みとることができる。一つは縞買の主たる取引形態の変化である。



有力縞買の多くが近江商人と結ぶことで、消費地直売を中心とする経営から卸問屋への買継を中心とする経営へと変化した。その結果、縞買は産地仕分問屋的な性格を帯びることになったのである。

もう一つは、在方縞買の拡大である。先述のように在方縞買は多摩郡西部を中心に飯能・入間方面に分布していた。しかし、慶応元年（一八六六）に近江商人に願書を提出した縞買のなかには、それまで見られなかった地域の者たちがいた。武蔵国比企郡上古寺村（埼玉郡比企郡小川町）に居住する岡本平兵衛（屋号亀屋）もその一人である。岡本家は嘉永元年（一八四八）に京都近江屋清兵衛の買継になった<sup>84)</sup>。同家は名主であるとともに、土地集積を続け、それをもとに金融業を展開し、酒造株三〇〇石を入手して酒造業にも関与するようになった。岡本家が織物に本格的に関わるようになったのは、天保期以降で幕末期から明治初年にかけて飛躍的に経営を発展させた。決算金額は嘉永元年（一八四八）に金五〇〇〇両、文久四年に金一〇〇〇両を数え、二倍の伸びを示している。岡本家の貸金先は、下古寺村周辺および小川町・八王子八日市宿・江戸・上州・信州にまで広がっている。

上古寺村の百姓は、通常、小川町あるいは川越の市を利用するのが一般的であった。小川町は近世初頭から地域市場として機能し、紙や織物などが取引されていた。周辺村々では元禄期頃から養蚕・織物が女性の農間余業としてさかんであった<sup>85)</sup>。小川町は文化期以降、江戸の呉服問屋とも取引を行っている<sup>86)</sup>。岡本家は亀屋という屋号で八王子に店舗を置き、小川や秩父の市で集荷した織物を八王子に持ち込んでいた。これは、八王子が周辺の地域市場のなかで突出した存在になりつつあったことを示していると言える。岡本家のような八王子から離れた地域の百姓が在方縞買として自村及び周辺村の織物を集荷し、八王子を取引の拠点としたことは、八王子縞市の興隆を促す同時に八王子周辺地域の地域市場が八王子に従属していたことを示している。

## (2) 八王子縞市の変容

天保期以降、八王子織物の取引は関西方面へも広がり、全国市場への展開が見られたが、その一方で、縞市・在方縞買・周辺村々（織元）の関係にも微妙な変化が生じていた。それが、安政四年（一八五七）二月の市立場の所替えおよび同年の縞買の八王子への出市拒否である。まず、市立場の所替えから見ていこう。

### 【史料5】

#### 一札之事

一八王子横山宿市場之義、三ヶ所共場所より西之方<sup>江而巳</sup>方寄市立有之、東之方<sup>者</sup>当月稼も薄く、場末之者共難渋ニ付、凡式丁程ツ、東之方<sup>江場所替</sup>、四日場<sup>者</sup>市神前、十四日場<sup>者</sup>何所、廿四日場<sup>者</sup>何所、右三ヶ所<sup>江市</sup>場立度、左候得<sup>者</sup>宿内市日之稼方甲乙無之、小前一統相助候義<sup>ニ而</sup>尤先規仕来之趣ヲ以堅相守り候条、右場所替之儀<sup>者</sup>市太物渡世ニ携候村々一同承知いたし候様、横山宿より当村迄折入<sup>而</sup>頼有之候ニ付、尚得<sup>与</sup>承り糺候処、全宿方申入候ニ相違無御座候、然ル上<sup>者</sup>猶村々<sup>ニ茂</sup>故障無之候間、右場所替之儀御聞届被遣度頼入候、依之村々連印差出申処如件

安政四年巳二月

武州多摩郡

拝島組合

同村名主

甚右衛門

（他七カ村八名略）

右の史料は安政四年（一八五七）二月、八王子宿横山宿が市立場の所替を行ったことに対し、拝島村組合村々九カ村が提出した請書である。先述のように、八王子横山宿では四・一四・二四日に市が立ち、市立の場所は、市日によっ

て異なっていたが、全体としては町の西側に集中している傾向があった。なかでも四日の市の場所は地の利が悪かったため、全体を東の方に移動し、市日によって不利益が生じないように調整がなされた。これは、宿方縞買および宿役人から提案され、在方縞買の了承を得た上で奉行所に届け出て実施された。この場所替は改革組合村を通じて村々に伝えられ同意が図られた。市の収入は宿入用の一部になっていたため、宿方縞買たちにとっては市を活性化させるために、場所替えは必要な措置であった。近世前期の絹市は宿方主導で運営されてきたが、一九世紀に入ると、市に集まる織物の大部分を差配する在方縞買は勿論、市場に商品を出す織元の村々の意向を無視しえなくなっていたことが看取できる。

次に、同年七月に縞買たちが八王子への出市を休んだ一件について紹介したい。休市の原因は、宿方の引替商が定めた金銭相場に不満があったからだとされている。翌五年（一八五八）に入ると、八王子周辺の村々一九カ村は在方縞買の休市に対して、横山宿名主一郎右衛門・八日市宿名主佐次兵衛・在方縞買中神村久次郎・同五日市村勘兵衛を相手取り訴訟を起こした。訴状において村々は「市潰為致、其都度織元村々ニ而縞数織溜り、果者直安ニ買取、此味相覚候故歟、右手限一件今以事済不相成、追々差纏ニ及、右ヲ幸ひ尚又今般縞買人之内久次郎・勘兵衛・重兵衛外同渡世之もの共申合、既去月廿四日・廿八日・当四日三市とも休市いたし、前同様縞数織溜売捌方強而無之村々難渋切迫いたし、一体縞買入共儀利欲之ため自儘ニ休市致、差纏を幸ひ直安ニ品物可買取巧ヲ以為致混雑候儀ニ可有之」と述べている。<sup>80</sup>村々は、金銭相場に不満を持つ在方縞買が、休市によって織溜まった織物を安く集荷して売りさばき、利益を得ようとしていると主張している。この一件は、在方縞買が市場を主導し、織元との間に対立を生じさせていたことを示している。幕末期になると、在方縞買のなかには八王子に店舗を持ち、市を通さずに織物を集荷し販売する者も現れるようになった。<sup>81</sup>こうした在方縞買の経営形態の変化が市場の運営にも影響を与え議論を引き起こしたとも考えられる。

## おわりに

以上、雑駁ではあるが、縞買仲間の動向を中心には八王子市の変容について述べてきた。近世初頭に領主経済の拠点として中世以来の町場を再編成して成立した八王子町は、元禄期以降、地域市場として成長し多摩地域の経済的拠点になった。その背景には、一八世紀後半以降、多摩地域西部の山間村落において養蚕と絹織物生産が主要産業として展開したことがある。

本稿では、まず、織物の流通・販売に携わった縞買の構造について分析した。縞買は居住地により宿方縞買と在方縞買に分けられる。在方縞買たちの多くは、名主・地主・金貸しとして養蚕や織物に携わる百姓（織元）の経営を支えてきた。織元と密接な関係を持つ在方縞買の市場に対する影響力は大きく、それは宿方縞買にとって脅威でもあった。そのため、寛政期から文政期にかけて鑑札の交付や「座並」の変更を申しかけ、様々な対立を引き起こすことになった。

その一方で、八王子織物が江戸向け商品として広く認知されるようになると、江戸の大呉服屋が縞買たちに接近し、寛政期以降、三井越後屋の買宿（代買）をつとめる縞買が出現した。従来、江戸の呉服屋は主として宿方縞買と取引したと言われるが、中神村の中野家の事例に見られるように、安価で良質な商品の供給のためには、むしろ在方縞買と結ぶことが有利であると認識していた。また、在方縞買側も取引を拡大するため、積極的に大呉服屋に近づいていく傾向があった。しかし、文化一〇年（一八一三）に江戸表呉服問屋仲間が江戸への直売を制限すると、縞買仲間はこれにはげしく抵抗し、中小呉服問屋との取引を続けた。こうして縞買たちは内部に宿方縞買と在方縞買との対立を含み、外部にあっては江戸表呉服問屋と対抗することになったのである。

天保期にいたると、縞買の経営に変化が見られるようになる。まず、第一に販路を関西方面へ拡大し、近江商人

の買継を勤めるようになったことがあげられる。第二は、一部の縞買及び織元のなかに賃織生産者を抱える者が出現したことである。第三に在方縞買のなかに八王子に店舗を構え、市を通さずに織物を集荷・販売する者が出はじめたこと、第四に八王子からかなり遠隔地に居住する者が縞買に参入してきたことがあげられる。このうち第四の事象は、八王子が地域市場として繁栄したことにより、それまで八王子周辺の地域市場を拠点としていた商人たちが八王子を市場として選んだことによる。第一から第三の事象は、八王子周辺地域が、養蚕・生糸・染色・織物までを一貫して行い、織物業が地場産業として展開し、それを縞買が把握していたことによる。

一八世紀後半、多摩地域の山間村落は養蚕・生糸・染色・織物を農間余業ではなく、再生産のために不可欠なものとして選択し、強固な織物生産圏を作り出した。八王子市場はこれによって繁栄し、周辺地域も含みこんで発展した。縞買たちの多様な営業形態や取引先の拡大も地場産業としての織物産業に依拠している。そして少なくとも天保期までは在方縞買が救恤活動等を通して織元と密接な関係を築いていたことが、織物産業を支えていたと考えられる。強固な地場産業が市場を支えていたところに八王子市場の特質を見ることができるのである。

## 註

- (1) 津田秀夫「寛政改革」(『岩波講座 日本歴史』一二、岩波書店、一九六三年)、同『封建経済政策の展開と市場構造』(お茶の水書房、一九六一年)。
- (2) 伊藤好一『江戸地廻り経済の展開』(柏書房、一九六六年)、同『近世在方市の構造』(隣人社、一九六七年) 江戸地廻り経済に関する研究史は長谷川伸三『近世農村構造の史的分析』(柏書房、一九八一年)・白川部達夫『江戸地廻り経済と地域市場』(吉川弘文館、二〇〇一年)に詳しい。
- (3) 註(2)長谷川著書、長倉保『幕藩体制解体の史的研究』(吉川弘文館、一九九七年)等。

- (4) 佐々木潤之介『幕末社会論』（塙書房、一九六九年）、渡辺尚志『近世の豪農と村落共同体』（東京大学出版会、一九九四年）等。
  - (5) 林玲子『江戸問屋仲間の研究』（お茶の水書房、一九六七年）。
  - (6) 石井寛治「維新変革の基礎構造」『歴史学研究』第五六〇号 一九八六年度歴史学研究会大会報告、一九八六年、谷本雅之『日本における在来的経済発展と織物業』（名古屋大学出版会 一九九八年）。
  - (7) 原直史『日本近世の地域と流通』（山川出版社、一九九六年）。
  - (8) 註(2)白川部著書。
  - (9) 正田健一郎編著『八王子織物史』上巻（八王子織物組合、一九六五年）。以下、『織物史』と略す。
  - (10) 『八王子市史』下巻（八王子市役所、一九六七年）。
  - (11) 『昭島市史』（昭島市、一九七八年）。
  - (12) 『定本市史青梅』（青梅市役所、一九六六年）。
  - (13) 八王子町の概要については『織物史』二九四～三二四頁を参照。
  - (14) 『織物史』五四三頁。
  - (15) 『織物史』五四六頁。
  - (16) 新保博・長谷川彰「商品生産・流通のダイナミックス」（速水融他編『日本経済史』Ⅰ経済社会の成立、岩波書店、一九八八年）。
  - (17) 『織物史』五五一頁。
  - (18) 『織物史』五六八頁。
  - (19) 天保期以降、八王子や江戸に店舗を持ち、市を通さずに織物を集荷し売買を行う綿買が出現し、安政期には、このことが問題化している（『織物史』五六五～五六六頁）。
  - (20) 『織物史』五七四頁。
- 『昭島市古文書調査報告書』3 中神村中野家近世織物仲買関係史料集』（昭島市教育委員会、一九八五年）六～八九頁。

以下『仲買関係史料集』と略す。

- (22) 中野家の経営実態については『昭島市史』九三九～一〇〇二頁を参照。
- (23) 『仲買関係史料集』二三～二四頁。
- (24) 『仲買関係史料集』二五～三〇頁。
- (25) 『仲買関係史料集』三一頁。
- (26) 『仲買関係史料集』六〇～六二頁。
- (27) 『仲買関係史料集』九六～九七頁。
- (28) 『八王子市史』下巻一〇五一～一〇五二頁。
- (29) 『仲買関係史料集』二二頁。
- (30) 八王子一件については『織物史』六一六～六二八頁、『昭島市史』九四五～九五四頁を参照。
- (31) 『仲買関係史料集』三二頁。
- (32) 『織物史』六一三～六一六頁。
- (33) 『仲買関係史料集』三四頁。
- (34) 『仲買関係史料集』四二～四五頁。
- (35) 『仲買関係史料集』四七～四九頁。
- (36) 『仲買関係史料集』三七頁。
- (37) 大塚英二『日本近世農村金融史の研究―村融通制の分析―』（校倉書房、一九九六年）。
- (38) 『三井事業史』本篇第一巻（財団法人三井文庫、一九八〇年）一八八頁。
- (39) 『三井事業史』本篇第一巻、四三八頁。
- (40)・(41) 「八王子買方式目」（財団法人三井文庫所蔵、請求番号特一〇二一）。

武州八王子に見る地域市場の展開―八王子縞買の動向を中心に―（岩橋）

- (42) 「江戸向店会所大坂店木綿方規矩」(財団法人三井文庫所蔵、請求番号別五)。
- (43) 『三井事業史』本篇第一巻、四四九頁。
- (44)・(45) 「江戸向店会所大坂店木綿方規矩」(財団法人三井文庫所蔵、請求番号別五)。越後屋は織物の品質を規制することで、買宿を統制しようとしていた。
- (46) 『仲買関係史料集』二三～二四頁。
- (47) 『東京市史稿』産業篇第四八巻(東京都、二〇〇七年) 三三五頁。
- (48)・(49) 『東京市史稿』産業篇第四八巻、三三三頁。
- (50) 林玲子『近世の市場構造と流通』(吉川弘文館、二〇〇〇年) 一九五頁。
- (51) 『織物史』六四三頁。
- (52)・(54) 『織物史』六七五頁。
- (55) 『仲買関係史料集』九九～一〇〇頁。
- (56) 『織物史』六八三頁。近江商人と八王子綿買との口銭値上をめぐる一件は、『織物史』等の従来の研究では、八王子綿買が産地仕分問屋的な性格を帯びる契機になった事件として評価されている。産地仕分問屋的な経営は、八王子綿買本来の経営とは矛盾するものであったが、取引先に合わせて経営形態を変化できる点に特色があると理解されている(『織物史』六八三～六八五頁)。しかし、綿買が様々な経営形態を選択し得た背景にこそ、地場産業の強固な展開を見ることができるのである。
- (57) 武蔵国比企郡下古寺村岡本家文書(國學院大學所蔵)、岡本家の経営については『小川町の歴史』通史編 上巻(小川町、二〇〇三年) 七三四～七四五頁を参照。
- (58)・(59) 『小川町の歴史』上巻五五六～五五七頁。
- (60) 『昭島市史』付篇(昭島市、一九七八年) 三六四～三六五頁。
- (61) 『織物史』五五六頁。



(62) 『織物史』 五六三頁。

(63) 『織物史』 五六六頁。

(いわはし きよみ 本学非常勤講師)

武州八王子に見る地域市場の展開——八王子綺買の動向を中心に——(岩橋)